

【翻訳】

豊子愷

えんえんとうすいひつ
『縁縁堂随筆』その二

Essay from Yuanyuantang

西 檣 偉

Isamu NISHIMAKI

要旨

The current paper is a Japanese translation of the modern Chinese writer and painter Feng Zikai's (1898-1975) 1931 essay, *Yuanyuantang Suihi* ('Essay from Yuanyuantang'). This was not only Feng's maiden literary work, but also became known as his masterpiece. This paper offers the second half annotated translation of Feng's essay, including a postscript. The first half with an introduction by the translator was printed in the last issue.

キーワード：小品文 豊子愷 縁縁堂随筆

【目次】

- 訳者の言葉
- 網を破る
- 徐々に
- 立達五周年記念
- 自然
- 顔
- 兒女
- 閑居

子どもから得た啓示

天の文学

〔以上は前号掲載〕

ある晩、東京での出来事

床板

姓

幼時の思い出

華瞻の日記

阿難

朝の夢

芸術三昧

縁

大きな帳簿

秋

訳後付記

ある晩、東京での出来事

東京で、わたしはちよつとした出来事に遭遇したことがある。それは些細なことにはちがいないが、しばしば興味深く思い出され、そしてわたしは憧憬の念に駆られる。

それは夏の夕方のことだった。日が暮れ始めたばかりで、わたしは同じ下宿に住む四、五人の中国人と一緒に神保町へ散歩に出かけた。東京も夜となればかなり涼しい。みんな気分よく玄関を出た。浴衣を着たものは袂を夜風に翻し、いっそう瀟洒に見え、歩く姿もゆつたり見える。

お喋りをしながら十字路にさしかかると、横の路地から背の曲がったおばあさんがあらわれた。床に敷く畳または障子だろうか、彼女は両手で大きな荷物を持ち、お辞儀をするように腰を丸めて通りに出てきた。彼女はわたしたちと同じ方へ曲がったが、歩くのが遅いので後に付いて歩いていいた。

わたしは先頭にいた。ふと後方でわたしたちの言葉とは異なる調子の日本語が聞こえたが、なにを言っているのかは聞き取れなかった。振り向くと、あのおばあさんが最後尾の某君となにやら話をしている。某君がそのおばあさんを見るやいなやすぐ振り向いて、ぴかぴかの金歯を光らせて首を振り、笑って言った。

「[yada, yada 1]」

なにものかから逃れるように、一同が前のほうに押し合いへし合い進んできた。先を行くわたしも押され、すたすたと数歩速く進まざるを得なかった。しばらくして、もう安全地帯に来たかのように、一同はもとの速さに戻り、そこでわたしは先ほどなにがあったのかを訊ねた。

あのおばあさんが某君に話しかけたのは、彼女がその大荷物を運ぶ

のが難儀で、わたしたちのなかの誰かにちよつと手伝ってもらいたいのことだった。

「どなたか手伝ってもらえませんか」と彼女が言ったそうだ。

たぶん愉快的気分で散歩に出てきた某君は、彼女のために重い荷物を持ちたくないで、いやだと二度も言つて答えたのだろう。しかし、そう言つてからすぐそこで難儀をしている彼女を見て、心苦しくなつたのではないだろうか。それで小走りで逃げるように彼女から離れようとしたのだろう。わたしが一部始終を聞いた時、彼女はもうわたしたちから二、三十メートル離れ、顔もはつきりと見えなくなり、声も聞こえなくなつた。でも、わたしたちの足取りはやはり少し速く、玄関を出た時のようにゆつたりとしたものではなくなつていた。黙っているが、一致した歩調からみんなそのことを気にしていることがわかる。

このことを思い出すたび、いつも考えさせられる。いまだかつてわたしは通りで見知らぬ人から、突然なにかを頼まれたことはない。あのおばあさんの言葉は、家庭または学校で使われるべきもののように思われ、決して通りで聞くことはできないものである。それは親しい間柄にある小さな団体のなかで使う言葉で、「社会」あるいは「世界」のような大きな集団のなかの互いに見ず知らずという関係にある人に使うのは相応しくないのだ。あのおばあさんは通りを家庭と勘違いしたのである。

そのおばあさんのしたことは世間知らずなところがある。しかし、わたしがこんな想像をする。もし本当にそんな世界が存在し、そこではみんなが家族のようで、お互いに親しく、助け合いながら生活をす。そうすれば、通りですれ違う人がみな家族となり、あの晩のおばあさんのしたことも唐突ではなくなり、世間知らずと思われなくなるだろう。それはなんと心惹かれる世界ではないか。

床板

幼いころ、わが家の天井が低くて狭い正面広間で、ちょうど蠟燭と線香を立て六神菩薩を祭る最中のことである。蠟燭の炎の上方わずか二尺のところはもう薄い天井板で、その上にはちようど便所にする桶が置いてあった。上で大小便をすれば、音は下からはつきりと聞こえた。当時のわたしは祖母や母の普段の振る舞いやことばから、仏事と排便の不調和を感じ取っていた。その時、便所にする桶の下で仏事を行う様子を見て、わたしは母に聞きただしてみたのである。母は「ばかね」という一言でわたしの質問を片付け、そして「隔重楼板隔重山（板一枚隔れば、向うはもう別世界）」と言った。

板の効用がそれほど大きいとは、当時のわたしには信じられなかった。「ばかね」と言う母のことはに圧倒されただけであった。後に上海で部屋を借りて住んだときに、わたしは始めてこの古語が名言だと気付かされたのである。確かに、「隔重楼板隔重山」なのだ。上海の空間は非常に合理的に区分され、住宅は近接し、板一枚隔れば、あたかも交通が遮断され、気候さえ異なる別世界となってしまうようで、「板」の力は山よりも大きいにちがいない。

五、六年前、わたしが初めて上海に越したとき、西門のとあるところに一階の間を借りて住んだことがある。同じ建物の一階と二階で、違う家族が住むというのが、わたしには初めてであった。わたしの郷里では、家の二階は寝室で、一階は先祖や六神菩薩を祭る広間と決まっておき、二階と一階で異なる家族が一緒に住むという習慣はなかった。その家はある人が見つけてくれたものだった。引越しの数日前、わたしは部屋を見に行った。それは三間の広さがある二階建てである。二階の三間は大家の住居で、一階左の間はすでに入居者がおり、中央の間正面に朱柏廬先生による格言の軸がかけられ、壁には書画が

飾られ、共用のスペースとなっている。その右の間が空いており、わたしはそこを借りる予定であった。初めて上海に住むわたしには、それは一軒の家にしか見えなかった。わたしたちはこれから全く見ず知らずの二家族と同居するのである。朝晩顔を合わせ、同じ出入り口を使う。これは偶然とはいえ、なんと奇しき縁ではなからうかとわたしは考えた。すると、わたしは二階に住む家主に声をかけ、挨拶をし、下で手続きでもしようかと思った。

家主の男は窓から頭をぬつと出して、どんな用事かねと言った。わたしは中央の吹き抜けのあたりまで歩いていき、上に向かって、「わたしはこの部屋を借りようとするもので、大家さんにちよつと話をしたいのですが」と答えた。その人は眉をしかめて、

「部屋を借りるのか。話すことはなにもありはしないよ。十二元払ってもらえば、部屋は明日から使つてよい」と言った。

そうして、頭は見えなくなった。それから一人の女が出てきて、頭が見えなくなった男の言ったことをもう一度繰り返した。わたしはやや気分を害し、しかし他に探すのも面倒だと思つて、十二元払つて、外に出た。

その後、わたしたちはそこに越した。部屋を借りたその日にわたしはすでに同居者の顔を見たわけだが、人と人の関係がこれほど冷淡で、床板の効用がこれほど重大だとは想像だにできなかった。出入りの際、または窓からたまたま隣人を見かけると、わたしはいつも彼らに声をかけ、隣人付き合ひをしようかという衝動に駆られたが、彼らの顔には犯すべからざる表情と、人を拒む力に満ちており、わたしはどうしても近づくことはできなかった。その部屋に半年間仮住まいをした間、床板一枚隔てた家主と、ホールを挟んで向かいの家族と毎日顔を合わせたにもかかわらず、結局は付き合ひもなく、会話を交わすこともほとんどなかった。たまに玄関口や中庭ですれ違つても、お互いわざと

目をそらして、まるで恨みでもあるかのようであった。

そこでわたしは母の言葉を思い出した。「隔重楼板隔重山」、わたしたちは彼らとは実は空気の異なる世界に住んでいたのであり、一枚の板で簡単に隔絶することができるのだ。板の力は山よりも大きいといわざるをえない。

姓

わたしの姓は豊である。この姓はわたしの知る限り、非常に珍しい。故郷石門湾でも、家だけである。故郷を離れてからも、豊という姓はあまり聞かない。それで相手がわたしの姓を聞いてから、いつも「それは珍しいですね」と言うわけだ。

そのためか、わたしは小さい時から、自分はただの人ではないという暗示を名前から受けた。それは豊姓が単に珍しいというだけでなく、石門湾でもわたしたち家族のほかにはない上に、しかも拳人に合格したのはわたしの父親だけだったからでもある。石門湾では、豊姓といえば拳人であり、拳人といえば豊姓のものでなければならぬというふうであった。わたしにはこんな思い出がある。小さい頃、父に仕える使用人の褚老五がわたしを連れて芝居を見に行った帰りに、「石門湾では老爺はほかにはいない、豊家だけが老爺だ。坊ちゃんも大きくなったら老爺におなり、豊老爺だよ」と言った。

科挙が廃止され、父は死んだ。わたしが十歳の頃、家で短期の仕事をしていた黄半仙は、ある晩わたしの一番上の姉に、「新橋のたもとにある米屋に、豊という若者がいるようで、どこの出身だろうな」と言った。姉も母親も信じられないというふうで、黄半仙にその晩すぐ様子を見に行かせた。本当に豊なのか。出身地はどこなのか。それはまるで、豊という家はほかにあるはずはない、あれば賈物にちがいな

いと言わんばかりである。

黄半仙が帰ってきて、「豊で間違いない。「養翰須豊」の「豊」だそうで、出身は斜橋らしい」と報告した。姉は長ギセルを口に含んだまま、「あら、ほんと？」「鄂鮑史唐」の「鄂」じゃないだろうね」と言ったが、それ以上追究もしなかった。

その後、わたしは杭州、上海、東京へと羽根を伸ばしても、出会った友人の中にも同姓のものはいなかった。豊というのは、果たしてわたしたつた一人だった。ところが、いくらわたしがただの人ではないという自己暗示を持って世を渡っても、豊という名前にふさわしいことをなすに至らず、未だに豊でない凡百の人間と同じようにその日を送る体たらくだ。拳人に合格しないのとはかく、珍しいこの名前のために、とんでもない迷惑ばかり蒙っている。「お名前は」と尋ねられて「豊と申します」と答えると、人はきつと追加説明を求めたり、または「馮」と聴き間違えたりする。ホテル、または夜城門で当直する警官が、わたしのことを素直に信じようとはせず、「そんな名前は無い」とまで言う。

最近寧紹の船で、一人の金融業者から大変いいことをわたしは教わった。客室にもぐりこんだら、先客に太った一人の金融業者がいた。彼は例により、「お名前は」とわたしに聞いた。わたしは「豊です、咸豊皇帝の豊です」と答えた。咸豊は随分昔の皇帝だからか、彼にはわからなかったようだった。わたしは指で字を書くジェスチャーをして見せたり、また「五穀豊穰の豊です」と言い換えてみたりした。「五穀豊穰」という熟語は金融業ではあまり使わないのだろうか。彼は依然としてわからないようだった。それでわたしは鉛筆を取り出し、タバコの包みに「豊」と書いて見せた。彼ははっとして、「ああ、なるほどそうか、匯豊銀行の豊ですね」といった。

ああ、なるほどそうか。匯豊銀行は確かに咸豊皇帝よりは今風で、

五穀豊穰よりも役に立ちそうだと。それから、名前を聞かれると私はそう答えることにした。

幼時の思い出

一

わたしには忘れられない幼時の思い出が、三つある。

一つ目は養蚕である。わたしが五、六歳の頃、祖母はまだ健在であった。祖母の性格はおおらかで、彼女は生活を楽しむことをよく知っていた。折々の節句を大切にするのはいうまでもなく、養蚕も毎年盛大に行うのである。実を言うと、それはわたしが大人になってからわかったことだが、祖母の養蚕はお金をもうけるためだけではなかった。桑の価格が高くなる年になると、よく損をしたものだ。しかし、彼女が暮春のこの行事をこよなく愛し、それで毎年盛大に行ったのである。わたしに嬉しかったのは、まず蚕が床に下りてくるときで、三間の広さのわが家のホールの床全体が蚕に占拠される。通行のためまたは餌やりのために、縦横に板がかけられた。使用人の蔣五伯しやうごはくが天秤棒をかついで、畑へ葉を摘みに出かけると、わたしは姉たちと一緒に彼について桑の実を食べに行った。蚕が床に下りる頃、桑の実は紫色になり、甘くなるのだ。それは山桃よりずっと美味しい。わたしたちが好きなだけ食べてから、大きな桑の葉で茶碗の形に作り、実をいっぱい摘んで蔣五伯に連れられ家に帰る。蔣五伯が蚕に餌をやり、わたしは通路の板の間を渡り歩いて楽しんだ。よく床に転んでは、蚕をたくさん潰したものである。祖母の掛け声で、蔣五伯がやってきて、わたしを抱き起こし、通路で遊んではいけないよという。でも、床にかけられた板は碁盤目の町並みのようで、歩いていて怖さを感じず、たいそうに面白く、それは本当に年一度の得がたい楽しみであった。だから、祖母

に叱られようが、わたしは毎日その上を歩いて遊んだ。

蚕を藁蔭わらかげに上蔭じやうえんさせると、家は静かになり、一同がそれを見守った。その頃、子どもが騒ぐのも許されず、わたしはひどくうつつとうしく感じた。しかし、数日後、繭を取り、糸を紡ぐので、またにぎやかな空気に満ち溢れるのである。わが家では毎年牛橋頭に住む七娘しちぢやう娘に糸紡ぎを依頼する。蔣五伯は繭とり、糸紡ぎ、釜炊きをする人たちのために、毎日枇杷と柔らかなお菓子を買ってくる。今は仕事が大変だが、希望の持てる時期であり、食べる権利があるのだといわんばかりに、みなは遠慮なく果物やお菓子を取って食べる。わたしは仕事をしないにもかかわらず、毎日枇杷とお菓子をたらふく食べ、これもまた楽しみの一つであった。

七娘娘が糸紡ぎの手を休め、水タバコを吸いながら、左手の小指をわたしに見せた。糸を紡ぐ時、絶対糸車の後ろに行つてはいけないよとわたしに言った。子どもの頃糸車の車軸に轆かれ、彼女の小指は半分ほど短くなっていた。「子どもは糸車の後ろで遊んではいけないよ。わたしの横に坐つて、枇杷やお菓子を食べなさい。それに、糸紡ぎでできたさなぎはお母さんに炒めてもらいなさい。とてもうまいから」とも言った。しかし、わたしは決してさなぎを食べなかった。それは、父や姉たちも食べようとしなかったからだと思う。わたしにとって楽しかったのは、あの頃の家の非日常的な雰囲気そのものであった。普段は開けない大広間の窓が開けられ、動かさない長い縁台や椅子は片付けられ、そこに見慣れない糸車や箆、甕が持ち込まれる。しかも、いくらお菓子を食べても叱られないのがよかった。

糸紡ぎが終ると、蔣五伯は「枇杷が食べたきゃ、来年の蚕の時だ」とつぶやきながら、糸車を片付け、家具などを元通りにする。一年一度の楽しみが終ると思うと淋しくなったが、この変化もまた珍しくて面白かった。

今子どもの頃を回想すると、本当に心をひかれてやまないのだ。祖母、蔣五伯、七娘娘や姉たちはみな童話の中の人物のようである。しかも、わたしから見れば、彼らがあの頃演じていた芝居の主人公はほかでもなくわたしであった。それはなんと甘美な思い出だろうか。ただ、芝居の題材について、今考えると、残念のように思う。蚕を飼い、糸を紡ぐのは、生計のためによいこととはいえ、それはもとは何千何万もの生き物を殺戮することにほかならない。蚕を飼うというのは、実は犯人を生かしておくのと同じである。糸を紡ぐというのは、実は彼らを焼き殺しの刑罰に処するのと同じではないだろうか。当時の喜びと幸せは、生霊の虐殺を背景にしていたとは。それがわかっていたら、わたしはみなと一緒に桑の実や枇杷、お菓子や絶対食べなかつたと思う。最近、『西青散記』を読み、その中には次のような仙人の句を見つけた。「自織藕絲衫子嫩、可憐辛苦救春蚕（みずから藕絲を織り 衫子 嫩く、辛苦を憐れみ 春蚕を救すべし）。人間も蓮根から糸を紡ぐ方法を発明し、蚕の命を助けることはできないだろうか。わたしが七歳の時、祖母は他界した。それより家では蚕を飼わなくなつた。間もなく、父も姉も弟も相次ぎ亡くなり、家運が傾き、わたしの幸せな幼年時代は終つた。したがって、わたしはいつまでもこの思い出に心惹かれるとともに、それによつていつまでも罪の意識にさいなまれることになつたのである。

二

次に忘れられないのは、父の中秋の月見で、その月見の楽しみは蟹を食べることを中心とする。

父が拳人試験に合格してまもなく、科挙は廃止された。家で酒を飲み、読書するのが父の日課となつた。彼は羊、牛や豚の肉はほとんど食べず、魚や海老が好きだつた。とくに蟹に眼がなかつた。七、八

月頃から冬場にかけて、普段父は晩酌にかならず蟹を一杯、隣の豆腐屋からアツアツの豆腐乾を一皿とり、肴とした。彼の晩酌は、いつも夕暮れ時に始まる。机の上には油のランプ、紫砂の酒壺、豆腐乾を盛つたひび焼き模様の蓋つき茶碗、水煙草の道具、本が一冊置かれ、机の隅に年取つた猫が坐っていた。この情景はわたしの記憶の中では非常に鮮明で、今でもありありと思ひ浮かべることができる。わたしが横にいれば、彼は蟹の脚を一本、あるいは豆腐乾を一口くれるときもある。わたしは蟹の脚が好きだつた。蟹はほんとに美味しく、わたしたち兄弟五人みな好きだつた。それも父が好きだつたからだと思う。母だけはわたしたちと違って、肉類が好きで、蟹が嫌いでもかもし食べ方を知らなかつた。彼女が食べると、いつも蟹のはさみに付いているとげに手を刺され、指から血がにじむ。それにきれいに肉を抉り出せないため、いつも父には素人だと言われる。蟹を食べるのは優雅なことで、食べ方も素人にはわからないのだと父は言う。先に蟹の脚を取り、甲羅を開け……脚の関節の肉はどうすればきれいに食べられるか、へその中の肉はどうすれば取り出せるか……脚のつま先は肉を取るときは道具に使える……はさみの骨を後で並べればきれいな蝶々に見えるなどなど、父はまさに蟹を食べる名人であり、肉を実にきれいに食べるのだ。それで、使用人の陳さんは、「旦那が食べ終わった甲羅は本物の甲羅だ」と言つたものだ。

中庭の隅の甕は蟹の生簀である。中にはつねに五、六杯はいる。七夕そして七月半ば、中秋、重陽の節句ともなれば、甕は蟹でいっぱいになる。そのときばかりは、わたしたち子どもの分までであり、一人で大きい蟹を一杯または一杯半食べられる。特に中秋の日、お祭り気分が最高潮に達する。黄昏も深まつた頃、食卓を隣の広場の月明かりのもとに移動し、そこで食べるのだ。時がたつにつれ、夜も静まり、月光のもとでテーブルを囲むのはわたしたち一家だけとなる。このほか、

使用人の紅英こうえいが横に座り、おしゃべりをしながら、月見をする。彼ら——すなわち父と姉たち——は月が傾く頃まで、そこにいて、わたしは途中で寝てしまうので、気がつかないうちに父や姉たちと別れるのである。

これは父が蟹を好むため、蟹を食べることを中心にしたものであった。したがって、このような夜の宴会は、中秋に限らず、蟹のある季節の月夜、行事などはなくともきつと何回か行われた。ただ、節句でなければ、わたしは子どもは多くは食べられず、せいぜい二人で一杯というふうであった。わたしはみな父にみならい、きれいに蟹の肉を取り、それをすぐに食べてしまうのではなく、みんな蟹の甲にためておく。肉を取り終えたら、酢やシヨウガを少し混ぜ、ちよつとかき混ぜてから、それだけでご飯を食べる。なぜなら父がおかずを食べるとき、実にはいたしな節約家で、それに彼は蟹を最高の味とし、蟹と一緒にほかのおかずを食べることをよしとはしなかった。それでわたしも彼に見習って、甲半分ほどの蟹肉でご飯を食べるのだ。二杯以上食べられたら、彼にほめられるだけでなく、残りの蟹肉をそれだけで食べられるので、みな節約に励んだ。蟹の脚半分の肉で二口もご飯が食べられ、それは最高に美味しかったことを思い出す。父がなくなつてから、わたしは二度とあんなに美味しく食べることはなくなつた。今、自分も父親となつたうえ、素食を始めたので、これからも二度とあの美味を味わうことはないだろう。ああ、子どもの頃の楽しかった思い出に、わたしは心をひかれずにはいられない。

しかし、この一こまの材料もやはり生霊の殺戮であった。当時わたし一家団欒の楽しみは殺生を背景とし、父の嗜好のためにわたしも殺生者の一人となつた。肉食は人類昔からの習慣とはいえ、それのみずからの命を養い、口腹の快のために生霊を虐殺することは、人類の初心にかえれば、それはやはり不自然であり、すべきことではない

のだ。文人には蟹を食べることをたたえた詩文があり、たとえば「右手持蟹、左手持杯（右手 蟹かまを持し、左手 杯さかずきを持す）」や「秋深蟹正肥（秋 深くして 蟹 肥ゆ）」などが挙げられる。作者や読者は、慣習にとらわれ、蟹食の趣味を賛美しがちである。もし、初心をただせば、蟹を殺してそのはさみを持ち、蟹が肥えたのを見て、殺そうとすることは果たして美しいのだろうか。それを詩文で賞賛する価値が果たしてあるのだろうか。

この思い出により、わたしはいつまでも心を惹かれる一方、いつまでも罪の意識にさいなまれるのだ。

三

忘れられない三つ目の思い出は隣の豆腐屋の子王団おうけんげんとの交遊である。その交遊は釣りを中心とする。

十二、三歳の時、隣の豆腐屋の子王団おうけんげんは、わたしの幼友達の中の大将であった。一人っ子で、その父がなくなつてから生まれたのだと彼は言った。彼の母親、祖母そして彼が「おじさん」と呼ぶ鐘さんなど、みんな彼を可愛がった。彼はおもちゃをたくさん持っており、お小遣いも多かった。それも、小さい仲間の中で英雄となるための条件であった。ほかの子どもたちは、いつの間にか彼を大将とし、彼に付き従つた。しかし、彼はわたしに対して、一目置いていた。当時わたしは母親にそれはなぜかと聞いた。母は「お前の父が彼の家の鐘さんの世話を焼いたから、それで鐘さんも彼に君と仲良くするようにと言つたからでしょう」と、わたしに言った。それはどういふことか、子どものわたしにはわからなかった。後で、「王団おうけんげんはその父の子ではない」とか大人の父が話すのを聞いたことがある。また、王団おうけんげんはお

もちやの弓矢でわたしの脚に当たったことがある。わたしが泣いたら、彼の祖母は「ばかな真似をおしでないよ、あの子は旦那のお子さんで、うちは旦那のお世話になっているのよ」と彼を叱った。それはどういうことか、わたしにはわからなかった。ただ、これらの会話から判断して、彼の家が困難な場面に遭遇したとき、わたしの父は彼らを助けたいことがあるようだ。それで、彼は家でわたしに仲良くするようにと言われたのだ。

わたしに初めて釣りを教えたのは王団だった。彼は彼の叔父に釣竿を二本買ってもらい、一本をわたしにくれ、もう一本は自分で使った。彼はまず米びつから虫をたくさん捕まえてきて、水を張った缶の中にいれ、それを手にわたしを連れて木場橋のほうへ釣りに行った。彼はわたしに手本を見せてくれた。虫を一つつまんで、それを釣り針で尻尾から頭まで刺し通し、川の中に入れる。そして、「浮きか動いたら、竿をすぐ引くんだ。そうすると、針が魚のあごにひっかかり、魚は逃げられなくなる」と彼は言った。わたしは、彼の言うとおりに実験してみた。果たして、その日は十数尾の白條魚を釣り上げた。ただ、竿を引いたのはいずれも彼だった。

翌日、彼は缶の中に半分ほど叩き殺した蠅を入れて、またわたしを釣りに引っ張っていった。途中、「米の中の虫より、餌には蠅がいい。魚は蠅が好きなのさ」と彼は言った。その日、わたしたちは小さな桶いっぱい魚を釣った。彼は桶をわたしの家を持ってきて、自分は要らないからと言った。母は紅英にそれを料理させ、わたしの晩ご飯のおかずとなった。

それからというもの、わたしは釣りが好きになった。王団がいなくても、一人で釣りに出かけた。そして、ミミズを掘って、魚を釣るというやり方も覚えた。釣ってきた魚は食べきれないので、店の店員たちや猫にも分けることができた。その頃、わたしが釣りに熱中した

のは、遊戯欲とともに、功利心も含まれていたような気がする。三、四年の間、夏になるとわたしはそうして釣りに熱を上げ、家の食費を随分節約した。

その後、わたしが成長し、遠方の学校に入学し、釣りをする余裕はなくなった。しかし、本の中でよく釣りを詠んだ詩句に出会った。たとえば、「独釣寒江雪（独り釣る 寒江の雪）」、あるいは「羊裘釣叟」、または「漁樵度此身（漁樵をしてこの身を度す）」の類である。それで、釣りというのは元来優雅な遊びだと知った。また後に「游釣の地」という表現も知り、それは故郷のたとえだという。わたしは、このことばに幻惑され、大いに感慨を催した。「釣りは確かに雅やかなことで、わたしの故郷は間違いなくわたしの游釣の地で、懐かしい故里にちがいない」とわたしは考えた。

ところが、今となって考えてみれば、不幸にもその題材はまた生霊の殺戮にほかならない。王団がわたしの世話を焼いてくれたが、彼は虫を刺し殺し、蠅を叩き殺し、それでさらにたくさん魚を誘殺することを教えてくれたのである。いわゆる「羊裘釣叟」というのも、実は羊皮のコートをまとった、魚の誘殺者にすぎず、いわゆる「游釣の地」というのも実は子ども頃魚を謀殺した場所にすぎないのだ。そう考えると、心が寒くなるばかりで、気高く雅やかだとは到底思えず、懐かしさは少しも感じないのである。

「殺すこと」、何を殺すにせよ、それは気分がいいはずはない。人が肉食をするのはみな欺瞞の行為だと思う。もし、豚を潰す場面を見れば、きつと一口もその肉を飲み下せないのではないか。人を多く殺した五・三〇事件は義憤を呼び起こしたが、蚕や蟹、魚を殺すことは人の喜びの助けとなる。同じ生霊である人類と蚕、蟹、魚の命の価値は、比べようもないほどである。

わたしの人生の黄金時代は短く、思い出されるのは以上の三つのこ

とのみで、残念ながらみな遊びの中で殺生し、わたしはいつまでも罪の意識にさいなまれることになったのである。

華瞻の日記

一

ぼくは隣り二十三番地に住む鄭徳菱ていとくびしが好きた。今日、お母さんに抱っこされたぼくは、彼女がコンクリートの路面で竹馬に乗るところを見た。彼女がぼくにっこりし、それは一緒に乗らないかという意味だとすぐわかった。ぼくもにっこりし、一緒に遊びたい気持ちであらわした。ぼくはお母さんの胸から降り、彼女と竹馬に乗りに行った。二人で同じ竹馬に乗り、ぼくが曲がりたいと言えば、彼女はいいよと言いい、ぼくがもう少し遠くに行きたいと言えば、彼女も喜んで付いてきた。また、彼女が馬に草を少し食ませたいと言えば、ぼくも喜んでとまり、彼女が馬を青木につないでおこうと言えば、それも悪くないなとぼくは考えた。ぼくたちは志を同じくする友達だ。ちょうど楽しく遊んでいるところへ、お母さんはぼくの手をひき、ご飯の時間だと言う。ぼくは、「いやだ」と言った。お母さんは、「鄭徳菱もそろそろご飯よ」と言った。果たして、鄭徳菱の兄が「徳菱」と言いながら出てきて、彼女の手をひいて帰っていった。それで、ぼくはお母さんと一緒に戻るしかなかった。ぼくらはそれぞれの家に入るとき、彼女がぼくのほうを振り向き、ぼくも振り向いて彼女を見た。それから、二人は各自の家に入り、互いの姿は見えなくなった。

ぼくはご飯など食べたくはない。彼女もきつと同じ気持ちだと思ふ。なぜなら、別れるとき彼女はにこりともせず、嬉しそうではなかったからだ。ぼくは彼女と一緒にいると、面白くてたまらない。ご飯を急いで食べる必要はないのだ。飯に食べるとしても、暇なときに食

べればよい。ぼくが思うに、ぼくたちのような仲良しは、毎日一緒にご飯を食べ、一緒にお休みすれば、どんなにいいだろう。二つの家に別れて住む必要はない。もし、二つの家に別れて住むとしても、お父さんが鄭徳菱のお父さんと仲がよく、またお母さんも鄭徳菱のお母さんとよくおしゃべりをする間柄なので、彼ら大人と一緒に住み、ぼくら子どもと一緒に住めば、それでいいじゃないか。

「家」という分け方を決めたのは誰だろうか。まったく不合理だ。きっと大人たちがひねり出したにちがいない。大人というものはしばしば不合理なことをする。たとえば、最近ぼくがお父さんと一緒に先施公せんせこう司しに行ったとき、店のフロアには小さな車や三輪車がいろいろと並べあり、それはどう見てもぼくら子どものためのものなのに、お父さんはそれらがそこに並べ置かれたままにして、ぼくのために一台も家に持ち帰ろうとはしなかった。帰る時、道端に車が何台も止まっているので、ぼくが乗ろうとしたが、お父さんはそれらの車を道端に止めたままにして、載せてくれなかった。また、ある時、お手伝いさんがぼくを連れて街に出かけたことがあった。そこで小さな花の籠をたくさん担いで、笛を吹くお婆さんがいて、手に籠を持って、ぼくを見るとそれをくれようとしたのに、お手伝いさんはぼくを抱っこして急いでそこを立ち去り、受け取ろうとはしなかった。その小さな籠は、もともと子供のおもちゃで、しかもそのお婆さんがどう見てもぼくにくれようとしたにもかかわらず、どうしてお手伝いさんがぼくに受け取らせようとしなかったのだろう。お手伝いさんも訳のわからない人だ、きつとお父さんに言われたにちがいない。

ぼくは鄭徳菱が大好きだ。彼女はぼくと身長が同じぐらいで、歩く速さも同じぐらいで、考え方も趣味もぴったり合う。宝姉たからあねさんや鄭徳菱の兄さんはちょっと違う。ぼくにはわからないところがある。たぶん、彼らは大きくなったから、大人に近いので、気持ちも大人のように

に訳がわからなくなったのだろう。ぼくは宝姉さんによく「ばかね」と言われる。たとえば、鄭徳菱が外遊びに出て来やすいように、よいお天気になるようにお父さんをお願いしたら、宝姉さんはぼくを「瞻瞻」たら、ばかね」と指差して言った。「ばかね」とはなんだい。姉さんが毎日カバンを小脇に抱えて学校に行き、ぼくと遊ぼうとしないのは「ばか」ではないのかい。お父さんが机の前に座つて、升目をつずつ文字で埋めているのも「ばか」ではないのかい。雨が降れば外では遊べないのは嫌なことではないのかい。いい天気になってもらいたいのは、少しもおかしなことではないと思う。姉さんが毎晩お父さんに電氣をつけるように頼むと、お父さんがつけてくれて、すると部屋は明るくなる。それと同じことだ。ぼくは、お父さんにお天気にしてくれるように頼んだら、お父さんがその通りにしてくれば、晴天は爽やかで嬉しいじゃないか。ぼくは「ばか」だと言われてもいい。鄭徳菱の兄さんは何も言わないけれども、ぼくは彼のことが嫌いだ。ぼくらが遊ぶとき、彼はいつも冷たい表情をして、鄭徳菱を迎えに来る。一昨日、ぼくが鄭徳菱と家の庭でパンくずをアりに食べさせる遊びに夢中になっていたところへ、彼がやってきて、「はだして人の家に入って、恥ずかしくないのかい」、または「人の家でパンをご馳走になり、恥ずかしくないのかい」と言つて、すぐ彼女を連れて行つてしまふ。「恥ずかしい」ということは大人たちの慣用句だ。彼らは退屈をもとめせず、恭しく椅子に座り、頷いたり、お辞儀をしたりする。さらに、「どうぞ、どうぞ」「すみません」「恥ずかしい」などと言つたら、彼らはみな大人になりつつある。

まったく！ 誰もぼくのことをわかつてくれない。ぼくは寂しくて仕方がない。「泣き虫だ」とお母さんによく言われるが、ぼくは泣かないでいられようか。

二

今日、ぼくは不思議な光景を見た。

甘粥を食べ終え、お母さんに抱っこされたぼくが食堂に入つたら、お父さんは一枚の大きな白い布を被り、外に向かつてうなだれて椅子に座つていた。黒い長衫しょうせんを着たあばた面の男が、ぴかぴか光るナイフを手に、お父さんの首を後ろから懸命に切つてゐるではないか。この光景はなんとも不思議であつた。大人たちのすることは、見れば見るほど理解に苦しむのだ。お父さんはどうしてあのあばた面の男にされるままにじつとしてゐるのだろう。痛くないのかな。

さらに不思議なのは、お母さんがぼくを抱っこして食堂に入つたとき、彼女もお父さんが切られるという驚くべき場面を目撃したにちがいないのに、彼女はなんとまったく意に介さず、何もなかつたかのようであつた。カバンを小脇に抱えて中庭から入つてきた宝姉さんが、きつと泣き出すのではないかとぼくは思った。しかし、彼女も「お父さん、ただいま」と言つたきりで、恐ろしげなあばたの男を見たものの、何事もなかつたかのように部屋に入つてカバンを掛けに行った。

一昨日、お父さんが指を切つたとき、彼は「痛つ、痛つ」と悲鳴をあげ、すぐに真綿と包帯を取りに行つたじゃないか。今日、その怖そうなあばたが歯を食いしばつて、お父さんの頭を切つてゐるのに、どうしてお母さんや宝姉さんたちは何も言わないのだろう。ぼくには解し兼ねる。ぼくが気に入らないのは、ずばりあの男だ。お父さんが鉛筆を挟むように、彼は耳に煙草を挟んでゐる。彼はきつと鉛筆などを持っていない、悪い奴にちがいない。

まもなく、お父さんがぼくのほうを見て、「華瞻、君も散髪をしな

いか、どうだい」と言つた。

お父さんがそのように言うと、男もぼくのほうを見た。彼の口からきらりと光る金歯が一本見えた。お父さんのことがぼくにはわから

なかった。ぼくは怖くなり、思わずお母さんの首に抱きついて泣き出してしまった。この時、お母さんとお父さんがその男といろいろ話をしたようで、ぼくにはあまりよく聞えなかったし、わからなかった。

「散髪」「散髪」という単語が聞えるだけで、それはどういう意味だろう。ぼくが泣いたので、お母さんはぼくを抱っこして中庭から外に出た。玄関を出るとき、ぼくは中をちらりと覗いてみた。窓の隙間から、歯を食いしばったあばたの男が、お父さんの耳を切るのが見えた。

外で、学生がボールを投げ、兵隊さんが体操をし、列車が通過する。お母さんは泣かないでと言い、ほら列車が通るよと言う。ぼくは家中の不可解なことが気になり、周りを見る気にもならない。ぼくはただお母さんの肩にもたれていた。

ぼくはあのあばたの男が嫌いだ。あいつは悪い奴に違いない。棒であいつを殴れと、ぼくはお母さんに言いたかった。しかし、ぼくはとうとう言わなかった。これまでの経験から、大人の考え方はぼくとはいつも反対なことはわかっていた。彼らはしばしば筋の通らないことをする。たとえば、一番まずい「薬」を無理やりぼくに飲ませたり、もつとも嫌な「洗顔」をぼくにさせたりする一方で、一番面白い水や、もつともきれいな火でぼくが遊ぶのを許してくれない。今日の不思議な光景を前にして平然としている彼らは、ぼくと考え方が異なるにちがいない。もしぼくが殴るといふ提案したら、反対されるに決まっている。やはり彼らにはかなわないので、諦めるとしよう。もう、泣くよりほかはない。また非常に不思議なのは、普段ぼくの水遊び、火遊びに理解を寄せる宝姉さんも、今日は出て来ては、ぼくを笑い、お母さんに向かって、ぼくを「ばか」と言った。お母さんに抱っこされ、家に戻ったとき、ぼくはやつと顔を上げた。あの不思議なことはどうなったのだろう。あの嫌なあばたはまだいるのかしら。敷居をまたいだ途端、「パン、パン」という音がした。食堂に入ると、あばたがちよ

うど拳骨でお父さんの背中を叩くところだった。「パン、パン」という音は叩く音だったのだ。彼は力を込めて叩いているようで、お父さんは痛みにちがいない。しかし、お父さんはなぜ叩かれてもじっとしているのだろうか。お母さんもなぜ何も言わないのだろうか。ぼくはまた泣き出した。お母さんは急いでぼくを抱っこして部屋に入っていく、お手伝いさんになにやら話をした。すると二人で笑い出し、二人してぼくにいろいろと話しかけてきた。けれども、ぼくは隣で人を叩く「パン、パン」という音が気になるので、彼女らのことばに耳を傾けるどころではなかった。

「人を叩いちゃだめだよ」とお父さんが言ったじゃないか。ある日、軟軟ちゃんや煙草のラベルをくれないので、ぼくが彼女を叩いたら、お父さんにひどく怒られた。そして、またある日ぼくが温度計を割ったら、お母さんにお尻を叩かれた。そうしたら、お父さんがぼくを助けにやってきて、「叩くのはよくない」とお母さんに言った。それになぜ今日あのおばたがお父さんを叩いても、みなは何もしないのだろうか。ぼくは泣き続けた。そのうち、お母さんの胸で寝入ってしまった。

目が覚めると、お父さんはピアノの横に座り、怪我はしていないように見えた。両耳とも無事で、頭はすっきりし、お坊さんみたいになった。お父さんを見て、ぼくはすぐさっきの不思議な出来事を思い出した。しかし、彼ら——お父さんとお母さんなど——は依然としてそれを話題にもせず、気にも留めていないようだった。ぼくが思い出すほど、不可解でいよいよ恐ろしくなった。どう見ても、お父さんが首を切られ、耳を切られ、拳骨で叩かれていたのに、みなに興味を示さず、ぼくだけが恐怖と疑問に苦しむのであった。ああ、恐怖を感じるぼくに同情する人もなく、ぼくが感じる疑問に答える人もいないのだ。

阿難

数年前、妻が死産をしたことがある。深夜、六寸ほどの赤子が母体を離れ、静かに生まれた。医者はその子を包帯にくるみ、わたしに見せてくれた。

「顔立ちが整った坊やだね。爪はもう揃っているのに、来るのが少し早かったね」と、彼は言った。わたしが医者の手の手首を見つめているそのとき、その肉の塊が突然動いたのだ。胸がピクツと動いて、手足が同時につっぱり、死に際の蛙が懸命にもがくようであった。わたしも医者もびっくりし、しばらく息をこらえて見つめていた。それきり肉は動かなくなった。そしてだんだん冷たくなっていった。

ああ、それは単なる肉の塊ではなく、一つの魂であり、人間だ。それはわが子であり、彼に名前をつけなくてはならない。すでに阿宝^{あほう}阿先^{あせん}、阿瞻^{あせん}がおり、また母親が彼のために苦しんだので、「阿難^{あなん}」にしよう。阿難の体を医者が持つていって、防腐剤の入ったガラス瓶に入れた。ピクツと動いた阿難がわたしには忘れられない。

阿難、その動き一つが君の一生だ。その一生はなんと短かったことか。束の間の命だった。わたしと君の間の親子の縁はなんとも浅いものだった。

しかし、それはみなわたしの妄想だ。わたしと君は実はたいした違いがないのではないか。数千万光年の中の七尺の体と無数の災難の中の数十年を、「人生」と言う。生命が誕生して以来、この「人生」は数千万回と繰り返されてきた。みな一瞬のうちにあらわれては、瞬間に消えていき、今わたしがそれを繰り返す番なのだ。よって、わたしがかりに百歳まで生きたとしても、災難の中にあつて、一度体を動かしただけの君とあまり変わらないのだ。さつき、あなたの短い命を嘆いたが、それは九十九歩が百歩を笑うようなものだ。

阿難よ、わたしはもう君のために嘆くまい。わたしは君の一生の天真と達観を讀める。わたしは、とつくに本来の自分ではなくなっている。人類が作り出す世間のさまざまな現象が、わたしの心の眼を覆い、わたしの本性を隠蔽してしまっている。そうして、わたしはあくせくする地球上の生活にだんだん適応し、人生がそうでなければならぬと思ふようにまでなつた。おぎゃあと言つて生まれたときのわたしの本性は、すっかり失われてしまったのではなかるうか。『西青散記』著者史震林は「自序」で次のように述べている。

わたしが生まれた当初、空がにわかにも明るくなつたり、暗くなつたりするのは怖かつた。それは昼夜の交替だと家族が教えてくれた。また、人が突如にあらわれたり、消えたりするのも不思議であつた。それは生死というものと教えられた。星の名前も教わつた。箕や斗などと。動物も教わつた。烏やかささぎなど。それは知識の始まりであつた。成長するにつれ、暗くなつたり明るくなつたり、あらわれたり消えたりなどについて、不思議に思わなくなつた。ただ、混乱極まるるとき、精神を高空の高みに置いて見下ろすと、にわかにも明るくなつたり暗くなつたり、あらわれたり消えたりすることに對して、わずかな悲哀を感じるのだ。

このくだりを読むと、わたしは思わず本を置き、大きく息をした。今までわたしは君の宝姉さんや瞻兄さんをよく賛美し、彼らの日常が天真そのものだと考えた。確かに、彼らの心の眼はいかにも純粹潔白で、わたしはまともに見る勇氣さえ持たないものだ。しかし、彼らを君と比べることができるのだろうか。彼らと君との距離は、わたしと彼らとの距離に等しいような気がする。彼らの生活は天真で自然だといえ、彼らの目も純粹潔白だといえ、結局彼らはもうこの世の知

識をすでに習得し始めており、この世からさまざまな誘惑を受けている。彼らはこの世の色合いに染まりつつあり、うつすらとしたもやが彼らの天真と純粹に陰を差し始めている。一方、君の一生は、そうした塵埃とは無縁だ。君こそ完全に天真で自然で純粹潔白な命なのだ。

世の人は、本来みな君のように天真で純粹な命を持って生まれるが、いったんこの世の人となれば、まるで荒唐無稽な夢に身を置き、狂乱の病に侵されたように、そうして疲労困憊して生命の故郷に逃げ帰るまで、ずっと支離滅裂なのだ。それはなんと暗愚な痴態であろうか。

君の一生は一度の跳躍で終わった。一瞬のうちに君はきれいにこの世での命を終え、生まれてすぐ解脱した。精神が麻痺していながらも狂奔するわたしは、君の天真と智慧を望もうとしても無理というものだ。

わたしは以前君の宝姉さんと瞻兄さんの天真爛漫な様子を見て、彼らの黄金時代が過ぎ去るのが惜しく、次のような一風変わった考えにとられることがあった。「子どもが十歳ぐらいの歳で病氣もせず死ぬ。それがもつとも価値のある、素晴らしい人生ではないだろうか」と。しかし、今考えれば、いわゆる「子どもの天国」「子どもの楽園」というのはずいぶん貧弱で狭小なものだ。それは浮世に疲弊し精神異常を来したもののみが羨むに値するもので、取るに足らないものだ。

君のように、すぐにその生死を全うし、浮世の苦しみを知らないで終わるのは、最高ではないだろうか。災厄の中にあつて、人生はもともと一度の跳躍にすぎない。君の一度の跳躍から、わたしはあらゆる人生を覗き見た。

しかし、それもわたしの妄想かもしれない。宇宙で人の生死は、大海原での波濤の起伏のようである。大波小波、それは変幻する海にほかならず、すべては海に帰るのだ。世間のあらゆる現象は、みな宇宙の大きいなる生命のあらわれである。阿難よ、君とわたしの縁は浅くはない。君はわたしであり、わたしが君なのだ。わたしたちの間に隔た

りはない。

朝の夢

わたしはよく夢の中で、今自分が夢を見ているのだと意識することがある。朝方、眠りが浅いときに、そう感じることが多い。これは、わたしだけの感じ方ではなく、話して見ると同感だという人は結構いる。

最近、そのような夢の体験をした。妻が二人の子どもをわたしに残して、田舎にしばらく帰省して行った。わたしは毎晩子どもたちと一緒に床に就く。彼らが先に寝付き、九時にはもうぐっすり寝ているので、それからわたしは本を読み、原稿を書き、彼らと同じ布団にもぐりこむのはよく深夜過ぎになる。夜が明けると、子どもたちは目を覚まし、小鳥のように、わたしの耳元で騒ぎ、たえずわたしを起こそうとする。しかし、わたしはちょうど朝の夢を見ている最中で、彼らの騒ぐ声をなんとなく耳にしなが、夢の中で漫遊をしているのだ。わたしがなかなか起きないので、子どもはわたしの耳に口を近づけ、「おとうさん、おはよう」と大声で言う。すると、わたしは夢に別れを告げなければならぬ。ちょうど夢のよいところだったり、中断しなくなったりするとき、わたしは彼らにもう一つ歌を歌ってから起きると言つて、それから布団をかぶりなおして、夢の彷徨を続ける。夢はそこで途切れずに続けることができ、途中で二三次起こされてもかまわない。ただ、そういうときの様子はやや変わっている。夢の糸口を探りながら先に進むわたしには、彼らの歌声がときれときれに聞こえてくる。つまり、夢の中で熱心に自分の役を演じながら、それが夢なのだという自覚はある。夢の中を彷徨する仮の自分がいて、子どもたちの横で寝ている本当の自分が同時に存在する。

子どもが泣きだしたり、あるいは夢が一段落したりすれば、わたしはやおら起き上がる。ベッドを降り、着替えをして、「さて今日はどんな仕事に取りかかろうか」などと意識し始める途端、夢の妄想はどこへやら押しやられてしまい、もうそれきりになるのである。

「人生夢のごとし」とは、昔から言われていることで、みなが共感することである。ならば、わたしたちの人生は、みな——わたしが朝に見る夢のように——夢の中で夢を見ているという自覚があるのではなからうか。そう思うと、わたしは戸惑いと悲しみに襲われ、そこから抜け出せず、自分をどう慰めてよいかわからなくなる。さらに思考を深める勇氣もなく、そのまま打ちやっておき、そのうち考えることにしよう。これもわたしだけの感覚というより、話せばかなり共感を得られるのではなからうか。

それはとてもわかりやすいことである。無限の宇宙の間を生きる人間は、限らない災難がうち続く数十年の人生とはいえ、上に向かっては星空の秘密を極め、下に向かっては地下の宝物を開発し、詩歌の美しい国土を切り拓き、哲学の神秘的境地に至ることができるところが、脆弱な体躯が壊れ朽ちるとき、その偉大な魂は跡かたもなく消えてしまう。「わたし」という人間の子どもの頃の楽しかったこと、青年期の憧れや中年に至った悲哀と充実感、名誉、財産、恋愛……人生の折々に、それらはなんと真剣に慎重に対処しなければならなかったであろう。しかし、その期に及べば、「わたし」はどこにも存在しなくなるのだ。悲しいかな、「人生夢のごとし」である。

しかし、振り返って人の世を眺めれば、不思議な気がしてならない。「人生」というものはこれまで何度となく繰り返されてきた。すべて水の泡のようにあらわれては消えていく。ほとんどの人は自分も同じ運命にあると知りながら、知らぬふりをして、熱心にその日を生きていく。——役所で公務員は熱心に事務を処理し、軍人は熱心に訓練を

している。商人はそろばんをはじくのに余念なく、教師は授業をおろそかにしない。人力車夫は懸命に車を引き、厨房で調理師はおいしい料理を作る……また、学生は勉学に励み、立派な社会人になろうとする。——これは自殺なのだ。緩慢なる自殺なのだ。

人生における物質的な幸せ、楽しい恋愛、幸せな結婚、社会的な成功などの観念に、わたしたちが幻惑されているからにほかならない。そのため、わたしたちは目先のことにとらわれ、考えるいとまもなく、人生の根本を追究する勇氣を持たずに、人生を終える。

「人生夢のごとし」、この言葉を文学的な美辞麗句として片付けないでほしい。これは夢を覚ます痛棒にほかならない。古人が気づき、わたしたちもそれを認めないわけにはいかない。わたしたちの人生という長い夢は、実に——わたしが朝に見る夢と同様——夢の中で夢を見ているという自覚があるのだ。夢の中で熱心に自分の役を演じながら、それははかない夢だということをみ知っている。夢の中の仮の自分と、本来の「真の自分」とがある。やおら起き上がり、着替えをし、真の自分の意識があらわれたら、夢の妄想はすぐに捨て去られて、顧みられることはない。

夢を見る友よ、わたしたちには「真の自分」があるのだ。その存在を忘れ、はかない夢におぼれてはならない。夢の中でそれが夢だと自覚し、「真の自分」のありかを探さなくてはならない。

芸術三昧

吳昌碩ごしょうの書を見た時のことである。一文字だけを見て、その字の筆画をそれぞれ見ても、いいとは思わなかった。また、文字をそれぞれ単独で見ても、それぞれの行を見ても、あまりよく思わなかった。しかし、その書は全体的に何とも言えない良さがある。部分的に見てよ

く思わなかったところが、全体的に見るとみなよく見えてくる。そうでなければ、逆に美しくないのである。

芸術としてのその書は、筆画、文字、行の単なる寄せ集めではなく、融合した統一体なのだ。筆画、文字、行は全体において、有機的にかわり合い、それぞれが全体のうちの一員なのだ。字の大きさ、位置、筆画の肥瘦、墨の濃淡、筆線の強弱などは決して偶然ではなく、みな全体の構成の必要にもとづく。すなわち、みな全体のためにそうなっており、それぞれに必然性があるわけではない。それで思うに、芸術として最高の書があるとすれば、どの文字、筆画においても、全体の傾向があらわれていなくてはならない。もし、一文字、一画が違っていたら、全体もすべて異なるものになる。また、どの文字、筆画を取り除いても、全体は成り立たなくなってしまう。言い換えれば、一画の中に、全体があらわされ、その一画に全体を見ることができ、そして全体をもって一つの統一体とする。

したがって、一点一画あるいは一文字、一行だけを見ても、わからないのは当然である。それが優れた芸術の特色でもある。絵画も同様だと思う。中国画論で言う「氣韻生動」はこの意味である。西洋印象派には、「それまでの西洋絵画において、大きな絵はみな小さな絵の寄せ集めで、少しも生気がない。芸術的な絵画は、画面が渾然一体としていなければならない」という持論がある。この点において、印象派の誕生は確かに西洋絵画の進歩と言える。

これは芸術の不思議な三昧境である。一画のうちに全体をうかがうことができる。全体で一つの集合体をなす。いわゆる「一に多種あり、二に両般なし」(『碧岩録』) というのもこういう意味であろう。矛盾しているようにも奥深いようにも見えるが、実はそれが芸術一般の特色であり、美学で言う「多様統一」でうまく説明できる。たとえば、三つのリングを果物売りがきちんと並べれば、それは「統一」と言え

る。ただ、統一はしばしば平板で生氣に欠ける。子どもが触れば、リングが左右に転がる。それが「多様」という状態だ。多様は散漫で乱れた状態である。そこへ画家がやってきて、リングをスケッチするために、絵になるように配置しなおし、——二つを後方へ左か右のどちらかに寄るようにし、もう一つを前方やや離れたところに置く——ちょうどよく見えるとき、それが「多様統一」と言って、美しいのである。要するに、統一しかも多様でなければならぬ。規則的であって、同時に規則的であってはならないのだ。一のうちに多を蔵し、多のうちに一がある。それが芸術の三昧境にちがいない。

宇宙は大芸術である。書画という小さな芸術だけでなく、宇宙という大芸術をも鑑賞すべきだ。書画を見る目で宇宙を見ることはできないだろうか。もしできるとしたら、さらに大きな三昧境を見出すことができるかもしれない。宇宙は渾然一体とした一つのまとまりで、森羅万象はすべてこのまとまりのうちの多様にして統一した諸相なのだ。この万象の一点一画のうちに、宇宙の全体をうかがうことができる。それでいて、森羅万象は一つの個体なのである。ブレイクの言う「砂一つの中に世界を見る」、あるいは孟子の「万物みな我に備わる」というのは、宇宙を一大芸術とみなして言ったことではないだろうか。芸術的な書画には、孤立して存在する一画もない。同様に、宇宙にも孤立して存在するものはないのだ。もし、全体のうちの一員でなければ、それぞれの個体の存在意義はなくなってしまう。それならば、「わたし」はどうであろうか。当然孤立して存在する小さな自我ではなく、宇宙全体の大きいなる自我のうちに融合すべきであり、そうして一大芸術を作り上げるのだ。

縁

一昨年秋のことである。弘一法師こういちほうしが旅の途次上海に立ち寄り、いか

なる縁に引き寄せられてか、彼は江湾にあるわたしの寓居に来て、しばらく滞在したいと言う。彼を北駅に出迎え、杖と天秤棒を受け取り、わたしは彼と一緒に車に乗り、江湾の縁縁堂に帰った。彼は二階に泊まり、子ども二人とわたしは一階で寝起きた。

毎日が暮れようとする頃、わたしは決まって二階に上がり、彼と話をした。彼は昼を過ぎれば食事を一切とらず、わたしは夕飯がかなり遅いほうである。したがって、みなが夕飯を食べる時間に、わたしたちは話していたことになる。彼はいつも早く就寝し、太陽の光とほぼ同時というふうで、電灯など照明は使わない。それで、わたしたちの会話は蒼茫とした暮色の中で交わされた。彼は窓に近い籐のベッドに腰掛け、わたしは奥のほうの椅子に座った。外の灰色の空を背景に彼の漆黒の胸像が浮かび上がる頃、わたしはようやく下に降り、彼は床に就く。このような生活は一ヶ月も続いた。今となつては、枯れることのない思い出の源泉となつた。

そうしてある日、二階に上がって、彼に会いに行つたときのことである。彼はいかにも嬉しそうな表情で、わたしの本棚から本を一冊抜き出し、表紙の文字を指差しながら、

「謝頌羔居士をご存知かね」と言つた。

彼が手にする本は、謝頌羔君が書いた『理想中人』であつた。かなり前に著者にもらつたその本を、わたしは書棚の下の層に横にして置いていた。ところが、家の子どもが機関車遊びをするのが好きで、わたしが横にして重ねていた本を数日前引つ張り出して、それを床に敷き、線路を作つた。遊び終わって、わたしの長女が片づけをしてくれた。その時、彼女はそれらの本を本棚の真ん中の層の外側に立てた。一番手に取りやすいそこから、弘一法師が本を取り出されたのだ。

「謝頌羔は友人で、クリスチャンです」とわたしが答えた。

「この本はなかなかいい。ためになる本だ。謝さんは上海に住んでお

られるのかい」

「彼は北四川路奥の広学会⁸で編集者として働いています。わたしは時々彼に会います」

彼は広学会を知っていたようで、話題がそちらのほうに落ちていった。なんでも広学会の設立は相当早いと言う。子どもの頃、彼が上海に住んでいたが、その時すでにあつたと言う。そこには熱心で真摯な宗教者が大勢集まり、仏教に関心を寄せ、『大乘起信論』を翻訳したこともある外国人宣教師ティモシー・リチャードもいたそうだ。話はまた『理想中人』とその著者に戻り、こんな有益な本はなかなかない、著者は立派な方にちがいないなどと彼は口々にほめた。また、わたしの書棚にどんな本があるか今まで見ようとしてもしなかつたが、今日たまたま取りやすいところにあるこの本を手にしたと言う。読んでみて、非常に感激したので、この類の蔵書はきつと豊富にあるだろうと探してみた。ほかはみな絵画や音楽に関する日本語の本であつた。

「縁は不思議なものだ」と彼は穏やかに言つた。

彼らが会う縁を作つてあげようと考え、わたしは次のように提案を試みた。

「そのうち、謝君に来てもらいましょか」

それは申し訳ないと彼は言つた。しかし、会いたい気持ちがある顔にはつきりと現われていた。

数日後、「慈良清直」を横の額に書き、彼はそれを巻いて書棚に置いた。夕方、わたしが上がって行つたとき、彼はそれを取り出し、何かのおりに謝居士に渡すようにと言われた。

翌日、わたしはその額を懐に入れ、広学会へ謝君をたずねた。事の経緯を話して、額を彼に渡した。彼は聞いて、見て、感激をし、

「来週会いに伺います」とわたしに言つた。

その日、隣人陶載良君が精進料理を用意し、弘一法師を昼食に呼ん

だ。謝君とわたしも呼ばれていた。席上、一人の敬虔な仏教徒と一人の敬虔なクリスチャンが向かい合い、にこやかに話しているところを目の当たりにし、わたしは彼らの談話に耳を傾けるよりも、目の前の光景に世間の「縁」の不思議さに感じ入った。この集いを実現させたのはわたしにちがいない。しかし、謝君がもしこの『理想中人』を出版しなければ、あるいは出版してもわたしに贈らなければ、またかりに弘一法師がわたしの寓居にやってこなければ、あるいは来てわたしの本棚に手を触れなければ、今日の会は実現しようがなかったであろう。さらに考えれば、その本は久しく書棚の下の層に埋もれ、もしわたしの子どもが線路を敷くためにそれを取り出さなければ、あるいはわたしの長女が片付けるときそれを手に取りやすいところに置かなければ、今日の会もまた実現しなかっただろう。こうして見ると、人間万事みなさまさまな「縁」によって結ばれており、どれが欠けてもいけないのだ。縁はまことに異なるものと言えよう。——これは一昨年の秋のことである。

このたび、謝君の『理想中人』が再版されることになり、著者はわたしに序文を求めてきた。『理想中人』というタイトルを聞いただけで、本を開くまでもなく、わたしの心は一昨年の秋の日の集いの情景に占領されてしまった。その回想を記して、巻頭に掲げることとする。

大きな帳簿

子どもの頃、船に乗って、町の外へ暮参りに行った時のことである。わたしが船の窓にもたれて、船べり近くをあらわれては消える波を夢中になって眺めていると、手に持っていた起上り小法師を水に落としてしまった。それは波の中へ落ちて、船尾のほうへ遠ざかり、一瞬にして跡形もなく、わたしの知らない世界に消えていった。それを、わ

たしはじっと見つめていた。空かになった手を眺め、窓の下で起伏する波を見て、起上り小法師をなくしてわたしは悲しくなった。さらに、船後方の果てしない川面をしばらく眺め、困惑と悲哀の情にうたれた。起上り小法師はどこに消え、これからどうなるのだろうか。わたしにはわからなかった。そして、この不可知という運命にわたしは悲しくなった。起上り小法師は波に流され、岸边に打ち上げられ、村の子どもに拾われるのかもしれない。あるいは、漁師の網にひっかかり、彼の船に飾られることになることもありうる。あるいは、いつまでも暗い川底に沈み、時が経つと土に戻り、世界からその存在がすっかりなくなることも考えられる。その起上り小法師は今どこかにあり、なんらかの形で行く末もあるだろう。しかし、わたしはそれを見届けることはできないのだ。この不可知の運命を誰が知り得ようか。困惑と悲哀はわたしの心の中をしばらく去来した。そのうち、もしかして父はそれを知っており、わたしの困惑と悲哀を取り除いてくれるかもしれないと考えた。でなければ、自分が大きくなって、いつかはきっとそのことを明らかにし、自分の困惑と悲哀を取り除くことができるにちがいない。

その後、はたしてわたしは大人になった。ところが、あの困惑と悲哀は、取り除くどころか、歳を重ねるたびに深くなり多くなるばかりである。わたしが小学校時代の同級生と一緒に郊外を散策する折、道端の木の枝をなげなく折って、しばらく *myself* 代わりにしてから田んぼの間に棄てて立ち去るとき、何度も振り返ったものだ。「この木の枝にまた遇えるのだろうか。木の枝はこれからどうなるのだろうか。これつきり遇うことはあるまい。それがどうなるのかもわかるまい」と、心の中で自問自答しながら。もし、一人で散歩をしているときなら、わたしはきっとそこで立ち止まり、しばらく木の枝との別れを惜しむのである。ときには、捨てたものを拾いに、わざわざ戻することも

ある。そうして、きちんと別れを言うてから、思い切つてそれを捨てて立ち去る。後で、わたしは自分のそうしたばかげた真似を笑うこともないではない。それは人生において、いちいち構つてはいられない些細な事なのだというのわかっている。とはいえ、あの悲哀と困惑は疑いようもなく、わたしの心に充満し、わたしはそうせざるをえないのだ。

にぎやかな場所で、または忙しいときに、わたしのそうした困惑と悲哀は心の奥に抑えつけられ、わたしはばかな真似をせず、普通に物事の取捨選択をすることができる。たまに困惑や悲哀が行動に少し現れたとしても、周囲の感化と現実の抑圧が非常に強力なため、すぐにそれを抑えつけてしまい、それがわたしの心に浮かんではずぐ影をひそめてしまう。しかし、静かな場所で、一人でいるとき、とくに夜にそれらはまたことごとく心に浮かび上がってくるのである。灯りのもとで、わたしは算術練習帳を横におしやり、筆を手に、反故紙に昼間に暗記した詩をなげなく書いてみる。「春蚕到死絲方尽、蠟炬成灰……（春蚕 死に到り 絲まさに尽き、蠟炬 灰に成り……）」と、途中でまだ書いては、それを火にかざし、すると紙の端に火がつく。火が燃え広がるのを見ながら、わたしは静かに文字たちに別れを告げる。すっかり灰となつてから、文字が書かれたあの紙が、ありありとその姿をわたしの目の前に現す。床に落ちた灰を見て、わたしはまた淡い悲哀を感じてしまう。もしわたしが今しがたそこにあつた、文字が書かれた紙をもう一度見てみたいとして、郷紳、県知事、省の長官、大統領にお願いをし、世界中の皇帝の権力を拝借し、さらに堯舜、孔子、ソクラテス、キリストなど古代の聖賢をよみがえらせ、彼らの力を得たところで、紙を復元することは不可能であろう。——しかし、わたしはそんな大それた望みを持つていないわけではない。わたしはただその灰に、もう見分けがつかない微塵のなかに、それぞれの文字の亡骸を

見てみようと思つただけである。どれが春という文字の灰で、どれが蚕という文字の灰なのか。……明日の朝になれば、掃除をする使用人によつて掃き出されたら、どうなるのだろうか。風に散るのなら、どちらへ飛んでいくのだろうか。どの家に春という文字の灰が飛び、どの家に蚕という文字が飛んでいくのだろうか。あるいはこの二文字が同じ家に向かつて飛んでいくのだろうか。……土に返るとしても、どんな植物の養分となるのだろうか。……すべてはとらえがたく、永遠に解けない難問である。

食事のさい、ご飯粒が茶碗からこぼれ、わたしの裾に落ちる。そのご飯粒を見て、気にしなければよいのだが、気にすると長篇の困惑と悲哀が心に浮かんでくる。誰が、いつ、どこの田んぼで、稲を植えたのだろうか。そのうちに、このご飯粒となる粃が実る稲穂があつたのだ。その粃はまた誰に刈り取られ、どんな人が精米に携わつたのだろうか。そうしてわが家にやつてきたその米粒は、ご飯に炊き上げられ、食事中にわたしの裾にこぼれた。これらの疑問にはそれぞれ答えがないわけではない。しかし、それを知るのは、当の米粒をおいてなく、この世でそれを調査し、一連の疑問に答えられる人はいない。

ポケットからコインをひとつ探り出すと、それにも明らかに紆余曲折した歴史があるはずだ。紙幣や銀貨は人の手を経るとき、印をつけられることがあるが、コインの流通は跡付けようがない。中には、物乞いが哀願して手に入れたものもあるだろうし、労働者の血と汗の代価である場合もあるし、それで一杯のお粥にありつき、空腹を満たすこともある。一つの飴玉となつて泣く子に与えられることもあるかもしれない。泥棒の盗品に含まれていたことだつてありうるし、富豪の太っ腹の横で眠つていたことも考えられよう。便所の溜め桶の底でのんびりと隠居を決め込んでいたものはないと言ひ切れないし、前述の経歴をすべて経験したというつわものだつてあるかもしれない。中

には、わたしのポケットを訪れたことがあるものもあるかもしれない。もしコインに口があったら、わたしは彼を上座に挙げ、その冒険談に耳を傾けたい。もし、コインが文筆を弄することができるなら、きつとそれぞれ『ロビンソン漂流記』よりも奇想天外な物語を描き下ろすにちがいない。しかし、彼らは黙秘権を行使する容疑者のようで、事件の一部始終を知っているにもかかわらず、固く口を閉ざしている。

三十歳になったわたしは、人生の半ばにさしかかっている。あのような疑問と悲哀は日に日に増すばかりである。しかし、少年時代のように、刺激は新鮮ではなくなった。それは学習のおかげだ。わたしは周りに見習い、そんなことに構うそぶりもなく、ご飯を食べ、お金をポケットにしまえば、それで事足りりで、夢もほとんど見ない。それが実生活には有益で、わたしは懸命に大衆を師とし、彼らの幸福に学んだ。しかし、三十歳になっても、わたしはなお卒業できないでいる。学習はあの疑問と悲哀による刺激を少しやわらげてくれるにすぎない。その分量は、日に日に増していく。ホテルをチェックアウトするたび、その部屋は虫が多く、気に入らないものだったとしても、わたしは一めぐりしてから立ち去る。「またこの部屋に泊まることがあるだろうか」と考え、そして「もうないだろうな」と慨嘆する。列車を降りるとき、旅でどんなに疲れていようと、横に坐っていた人が嫌な人だったとしても、わたしはいつも特別な気持ちになる。「この人とまた隣り合って座ることがあるだろうか。おそらくないだろう。」しかし、こうした感慨は池の上をかすめて飛ぶ鳥の影のように一瞬そのあいまいな印象をわたしの心に残すだけで、わたしはまもなく我に返る。これまでの学習のおかげである。しかし、これも先生——大衆——が目の前にいなければ、簡単に切り抜けることはできない。先生がいなくなれば、つまり一人であるとき、わたしはすっかりもとどおりになつてしまう。ちょうど今がそうなのだ。窓から、桃の花の白い花びらが

春風に乗り、飛んできて、わたしの原稿用紙に落ちた。それはわが家の庭にある木から飛んできたものにちがいない。しかし、どの枝に咲いていたどの花の花びらだったのだろうか。窓の前、地面に雪のように散り敷く無数の花びらも、もとはそれぞれ枝に咲き、萼についていたものだ。それぞれどこにあったのかを突き止め、彼らをもとどおりにするには誰にもできはしない。戸惑いと悲哀はまたわたしをとらえて放さないのだ。

とにかく、子どものころから今まで、わたしの心はたえずあの戸惑いと悲哀に襲われ、やすむ暇はなかった。歳を重ね、知識を身につけるにつれ、その襲撃はますます激しくなるばかりだ。大衆というお手本が厳しく抑圧するほど、その反動は強くなるのだ。もし、これまで、わたしが経験したこのような戸惑いと悲哀の数々をすべて記録するならば、きっと『四庫全書』や『大蔵経』の分量に勝るとも劣るまい。それでも、わたし個人の三十年という短い間の経験だけであり、広大な宇宙や世界において、生物、無生物の数は無限にあり、それらの間の出来事は想像を絶する分量で、わたしの経験は恒河沙の一粒にすぎない。

一冊の巨大な帳簿がわたしに見えるようだ。そこに、宇宙、世界のあらゆるものの過去、現在と未来が詳細に記されている。原子という微細なものから、巨大な天体に至るまで、微生物の行動から混沌とした災難まで、その原因、経過や結末がもれなく記載されているのだ。ようやく、それでわたしの戸惑いと悲哀が、取り除かれる。起上り小法師の行く末、*the end*のその後、灰の行く末についてはすべて記録があり、ご飯粒とコインの遍歴も、すべて調査され、ホテルや列車とわたしの因縁もそこでは予定されていたことなのだ。桃の花の白い花びらの運命もそこではことまかに検証できる。わたしがしばしば永遠に知ることのできないものと嘆く、庭の砂利の数もそこでは正しく

カウントされ、しかもわたしが昨日手に取って眺めたものには、そのことについて注記がしてある。もし、それらをもう一度手にとろうとするなら、その帳簿をもとに探せばよい。——三十年來、わたしが見たこと、聞いたこと、したことすべてが、そこにつまびらかに記され、考証されている。それでも、PAGEの一角、本全体からみれば、無量大分の一を占めるにすぎない。

宇宙にきつとそんな帳簿がある。そうして、わたしは戸惑いと悲哀にとらわれることはなくなるのだ。

秋

三十歳を過ぎて、二年が経つ。なお悟りの境地に程遠いわたしは、三十という数字にさまざまな暗示と影響を受ける。自分の体は二十九歳の時と比べて、なんら変化はないと感じるが、三十という観念は日傘のようにわたしの体に薄暗い影を落としている。それはまるで、暦の上で立秋を過ぎると、日差しは強いままで気温も急激に下がるわけでもないのに、もう残暑または霜が降り木の葉が枯れる冬の前触れとして意識し、季節はもう秋になったのだと感じると同様である。

実を言うと、二年來わたしは、もっとも秋にひかれていた。心持ちも秋に近い。これまでになかったことである。かつてわたしは四季の中で、とくに春が好きだった。わたしは、柳の木と燕が好きだ。浅黄に染まる頃の柳は一番よい。わたしはみずからの住居を「小楊柳屋」と名づけたこともある。柳や燕の絵も多く描いた。さまざまな曲線を描く細長い柳の葉を取って、厚紙に貼り付け、そうした眉を持つ顔をイメージし、その下に目鼻、口を描き添えたこともある。あの頃、早春はちようどお正月と二月の間にやってきて、柳の枝に小さな珠のような芽が萌え出て、遠くからかすかな青色が目に入る。そうして、わ

たしの心は喜びに満ち溢れるのである。この喜びはすぐ焦慮となり、「春だ。すぐ行ってしまおう春だ。はやくお迎えして、存分に楽しんで、なるべく引き留めておこう」と、心の中でいつもつぶやいているようであった。「良辰美景奈何天（良辰 美景 天に奈何せん）」といった詩句に心底から感動したものだ。過ぎ行く春を惜しみ嘆く古人に鑑み、みすみす春をむなしく逃すまいとわたしは考えた。古人がもっとも強く惜しむ寒食、清明の頃、わたしの焦慮は頂点に達する。その日をわたしはよき日に相応しく過ごそうと、いろいろと思案をめぐらすのであった。詩をつくり、絵を描き、酒を飲み、遠出をする。しかし、それはほとんど実行されることはなく、あるいは実行されたとしても楽しかったどころか、酒に酔ったり、問題を起したり、むしろ不愉快な思い出になった。にもかかわらず、わたしは春への愛着を捨てることはなかった。わたしの心に季節は春しかなく、ほかの季節は春のための準備あるいは春に至るまでの待ち時間であって、それらの存在意義にわたしはまったく気が付かなかった。そして、秋に対して、わたしは何も感じることはなかった。なぜなら、夏は春に続く季節で、わたしには春の余りとしてとらえられ、冬は春の前にあり、わたしはそれを春の準備とみなすことができたのだ。春とはかわりのない秋は、わたしにはなんら意味はなかった。

年齢が立秋を告げてから、二年來心境が一変し、秋が深まった。しかし、わたしはこれまでと違って、喜びや焦慮を覚えることはない。心が落ち着くのだ。かつての喜びと焦慮が影を潜めただけでなく、秋の雨、風、色、光に心惹かれて、わたしはその中に打ち溶け、自分の存在さえおぼつかなくなる。一方、春に対して、かつて秋に対するように、何も感じないというわけではない。今のわたしは春を嫌悪する。大地に春がやってくると、花が艶を争い、蝶々や蜂が騒いで、草木昆虫は成長を競い、さかんに繁殖をする様子を見るにつけ、この世の凡

庸、貪欲、無知、愚昧がこれにすぐるものはないと感じるのだ。とりわけ初春、柳の枝が芽吹き、桃の枝に赤い斑点が目立つてくると、わたしは可笑しくそして可哀想に思ってしまう。まだ咲かぬ花を眠りから起して次のように言いたい。「おい、いつまでそんなことを繰り返しているのだ。お前の祖先がお前と同じように生まれ、懸命に成長し、そして華やかさを競うのをわたしはずっと見てきた。やがて萎んで、みな土に返っていった。おまえはそれを繰り返す必要があるのだろうか。成長して美しく身を飾り立て、笑顔を振りまくだろうが、おまえは罪の根を植えつけられており、やはり痛めつけられ、折られるなどの憂き目に遭い、おまえのご先祖の二の舞を踏むだけだ。」

じっさい、三十数回も春を迎え送ってきたわたしは、花を見飽きたのだ。わたしの感覚は麻痺し、情熱も冷め、初めて世界に対面する青少年のように花の姿に惑わされることはなくなった。花を賛美しては惜しむこともなくなった。万物は栄枯盛衰、生々流転の運命にあり、それから逃れることはできない。歴史はこのことをよく示している。古来無数の詩人の春を惜しむ作品は、千篇一律でなんともつまらない。もしこの世の生榮死滅を詠うなら、わたしは死滅を賛美する。前者の貪欲、愚昧、卑怯に対して、後者の態度はなんと謙虚で、達観し、偉大であろうか。春と秋に対するわたしの好悪は、ここから来ている。

夏目漱石は三十歳のとき、次のように述べたことがある。「世に住むこと二十年にして、住む甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所は屹度影がさすと悟つた。三十の今日はいかと思ふて居る。——喜びの深きとき憂愈深く、樂みの大いなる程苦しみも大きい。」¹⁰ わたしは今、この言葉に深く共感する。三十歳の特徴はこれだけではないと感じることもある。とくに死に対する体感はそのままでと違うのではないかと思う。若者は恋に敗れたときによく生きるの死ぬのと口にする。しかし、彼らは「死」を体感ではなく、頭

で知っているにすぎない。扇を使いながら氷を食べる夏の日に、炉辺で蒲団にくるまる冬を想像するようなものだ。四季のめぐりを三十数回も経験したわたしでも、数日前の炎暑の日に日向ぼつこの気持ちよさを体で感じることはできない。ストーブにあたる、蒲団にくるまる、日向ぼつこをするなど、夏の日を暮らす人にとって、それは単なる知識で、そのうちそうするだろうと知っているにすぎない。秋になり、灼熱の太陽はその勢いを徐々に弱め、汗でふやけた肌もすつきりし、一重では寒くなり、フランネルの肌触りが気持ちよくなる頃、ストーブ、蒲団、日向ぼつこなどの知識がようやく体験を通して体感を伴う。年齢が立秋を告げてから、わたしは「死」を体で感じるようになった。これまでのわたしの思慮はなんと浅かったことか。春はかならずやってくるもので、人は青年のままでもいられるのだと考え、死にはまったく思いつかなかった。また、人生の意義は生にあるとばかり思っていた。自分の人生がもっとも価値があり、いつまでも生きられるような気がしたのである。そうして今、秋の光に照らされ、死の靈気に薰陶を受け、ようやく生の悲歎辛苦が太古より繰り返されてきた常套であり、取るに足らぬものだとなつた。穏やかにこの生を全うし、解脱することを願うばかりである。あたかも狂気の病に侵された人が、病中前後不覚になつたとしても気にしないのと同様、ただ完治を願うのみだ。

ペンを置こうとした矢先、空に黒雲が広がり、遠くを稲妻が走った。続いて雷がとどろき、雹混じりの秋雨が突如降りだした。そうだ。立秋が過ぎて、まだ数日しか経っていない。秋の心は未熟なため、こうした穏やかなくない現象が起きるのだ。恐ろしいかな。

訳注

- 1 原文表記のままとした。原文では、続いて括弧の中で語釈をしている。
- 2 朱柏廬（一六二七—一六九八）、清初の人、名は用純、字は致一、号が柏廬。程朱理学を治め、康熙中、鴻博に推されたが固辞した。その『治家格言』は、世で『朱子家訓』と称された。
- 3 官僚、科挙試験合格者などの豪族、有力者に対する呼称。
- 4 後出の「鄂鮑史唐」と同様、『百家姓』にみえる語彙。
- 5 一八六四年香港で設立されたイギリス系銀行。翌年上海支店が開設された。アジアの貿易金融に大きな勢力を占め、上海でもっとも有力な銀行となる。
- 6 旧上海四大デパートの一つ。上海初の民族資本によって、一九一七年十月に開店。七階建てに増築後、六、七階に演芸場「先施楽園」が設けられた。
- 7 史震林（一六九二—一七七八）、清の文学者。字は悟岡。乾隆時の進士。詩文をよくし、『西青散記』のほか『華陽散稿』などがある。民国期に刊行された『天上人間』（出版合作社、一九二六年十二月）は『西青散記』の抜粋で、豊子愷はその表紙デザイン（題字と装画）をしている。
- 8 英米のプロテスタント宣教師によって、一八八七年上海で設立された出版機関。キリスト教や西学を伝え、清末の維新派に影響を与えた。一九五七年青年協会書局などと合併し、中国基督教聯合書局となる。
- 9 中国名は李提摩太（Timothy Richard 一八四五—一九一九、中国滞在は一八七〇—一九一六）、イギリスの宣教師、一八七〇年から八七年まで山東、山西省で活動。一八九一年より、上海同文書会の総幹事となる。同会が広学会となつてからも、総幹事を歴任。張之洞、李鴻章と親しくした。日清戦後、『新政策』を著し、清朝に「新政部」を設けるよう求めた。維新運動のリーダー康有為、梁啓超とも交流があった。一九

〇一年義和団運動失敗後、地方の賠償金で山西大学堂を設立。

- 10 夏目漱石「草枕」からの引用。同書は漱石が三十歳の時の作品ではなく、テキストを作者自身の心情の吐露とすることにもやや問題がある。

〔訳後付記〕

『縁縁堂隨筆』初版（上海開明書店、一九三二年一月）は序文もあとがきもなく、本文九七ページの薄い冊子である。至ってシンプルな装幀で、表紙に著者の題字が見えるのみで、扉頁には長方形の枠に縦の罫線を引いた図案が用いられている。

初の文集で代表作ともなった同書は、初の画集『子愷漫画』と好対照をなす。後者は鄭振鐸の「序」に始まり、夏丏尊「序」、丁衍鐸「序」、朱自清「代序」、方光燾「漫話」、劉薰宇「序」と著者自身による「題卷首」の計七篇の序文を巻頭に置き、巻末に俞平伯の「跋」が添えられている。百ページほどの画集に序跋文が四分の一の紙幅を占めているのだ。周囲の好意的な期待とともに、文芸界の推奨を得ようとした作者の意図も背景にあるだろう。結果的に、同書は反響を呼び、出版して間もなく開明書店からも刊行されることになった。

『縁縁堂隨筆』末尾の「秋」で、三十歳を過ぎて、落ち着いた秋のような心境となったことを作者は吐露している。同書の初刊形態は、作者のそうした心境を物語っているのかもしれない。また、すでに文芸界に認められていた作者は、華やかな装幀や文壇有力者による序文を必要としなかったのだとも考えられる。

本書の流布について、初版のほか、一九三三年六月第三版、一九三四年四月第四版、それから台湾開明書店、一九六八年十月台一版、『豊子愷文集』第五卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月収録のものを見る事ができた。上記第三版と第四版の間で、「幼時の思い出」第三節のテキストについて著者による改変があった。その後、作者が手を加えたの

は、一九五七年人民文学出版社より『縁縁堂随筆』を刊行する際である。初版から十二篇を収録する同書のテキストは、一九九二年六月版『豊子愷文集』に受け継がれている。

今回、翻訳にあたり、初版と『豊子愷文集』所収テキストを見比べた。その結果、後者において字句の手直しがかなりなされており、もともと多くみられたのは「ある晩、東京での出来事」である。「page」「title」といったローマ字語は、「書頁」「手杖」に直されたことも目を引く。初版テキストではローマ字の語彙がもつと多かつたようである。

さらに、日本語訳をしながら、豊子愷の文章がかなり日本語の影響を受けたのではないかと感じた。小品随筆を創作するまで、彼は厨川白村の『苦悶の象徴』をはじめ、日本語書籍を精力的に翻訳し刊行したことを思えば、日本語の語彙や構文レベルの影響が見られても不思議なことではない。よって、豊子愷の文体の形成を、その初期翻訳と創作から跡付けることができるのではないだろうか。その文体を読者がいかに受け止めたのか、それも興味を持たれるところだ。

最後に、筆者の研究に支援を惜しまない豊子愷のご遺族諸氏、ともに豊子愷研究をする知友の皆様には謝意を表す。皆さまのご支援とご協力を得て、豊子愷文学を日本の一般読者に届けることができたらと考えている。

『縁縁堂随筆』所収各篇の初出一覧を最後に掲げておく。

「網を破る」原題「剪網」『一般』第四卷一号、一九二八年一月

「徐々に」原題「漸」『一般』第五卷二号、一九二八年六月

「立達五周年記念」未詳

「自然」原題「自然頌」『小説月報』第二十卷一号、一九二九年一月十日

「顔」原題「顔面」『小説月報』第二十卷二号、一九二九年二月十日

「児女」原題「児女」『小説月報』第十九卷十号、一九二八年十月十日

「閑居」原題「閑居」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「子どもから得た啓示」原題「從孩子得到的啓示」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「天の文学」原題「天的文学」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「ある晩、東京での出来事」原題「東京某晩的事」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「床板」原題「楼板」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「姓」原題「姓」『小説月報』第十八卷七号、一九二七年七月十日

「幼時の思い出」原題「憶儿时」『小説月報』第十八卷六号、一九二七年六月十日

「華瞻の日記」原題「華瞻的日記」『小説月報』第十八卷六号、一九二七年六月十日

「阿難」原題「阿難」『小説月報』第十八卷十一号、一九二七年十一月十日

「朝の夢」原題「晨夢」『小説月報』第十八卷十一号、一九二七年十一月十日

「芸術三昧」原題「芸術三昧」『小説月報』第十八卷八号、一九二七年八月十日

「縁」原題「縁」『小説月報』第二十卷六号、一九二九年六月十日

「大きな帳簿」原題「大帳簿」『小説月報』第二十卷五号、一九二九年五月十日

「秋」原題「秋」『小説月報』第二十卷十号、一九二九年十月十日